

## 第26回日本臨床微生物学会総会・学術集会

中野 忠男\*

第26回日本臨床微生物学会総会・学術集会は平成27年1月31日から2月1日にかけての2日間、新宿の京王プラザホテルで開催された。東京は前日の30日に雪が降り、新宿駅近くの宿泊ホテルから京王プラザホテルまで路肩や道々の生け垣に積もった雪が大小に点在していた。

会場はホテルの3階から5階に設けられ、5階の第一会場において開会の宣言があった。今回の学会では「ミクロから考えるマクロの世界」をテーマとして、総会長は慶應義塾大学医学部感染症学教室の岩田 敏先生、副総会長は(株)ミロクメデ

イカルラボトリーの柳沢英二先生がそれぞれ務められた。余談ではあるが随分と昔、慶應義塾大学医学部感染症学教室の前身である寄生虫学教室にお世話になったことがある。当時かなり古い文化遺産的建造物の中に教室や実験室があったことを思い出した。

また昔の話で恐縮ではあるが、平成6年に第5回日本臨床微生物学会総会が大分で開催された。会長は大分医科大学第2内科の那須 勝先生で、副会長が九州大学医学部附属病院検査部の竹森紘一先生だった。そして当時、大分医科大学病院検査部に所属していた私は両先生に色々とお世話になったことを思い出す。まだ設立して間もない学会ではあったが活気に満ちて、医師と臨床検査技師が臨床という同じ土俵で微生物に関する研究について議論する場として、大変新鮮に感じたことを記憶している。

話を今に戻そう。総会長の岩田先生はその講演「チーム医療と臨床微生物学」で院内感染防止策について医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師をはじめその他のメディカルスタッフや事務職員とのチームワークが重要であること。そして、病院における感染制御の質は、その病院の微生物検査の質によって決まると断言された。とまれチーム医療の重要性については医療関係者にとって周知のことであるが、「院内感染対策の質は微生物検査技師の能力で決まる」ということである。この講演を聴講していた臨床検査技師は良い意味でゾクゾクしたと思う。



学会場 京王プラザホテル

---

\*純真学園大学保健医療学部検査科学科 nakano.t@junshin-u.ac.jp

評議員会ではちょっとした事件が起きた。いつものように年度事業計画とその承認の後、第27回日本臨床微生物学会総会・学術集会の総会長が東北大学病院診療技術部の長沢光章先生、副総会長が聖マリアンナ医科大学内科学総合心療内科の國島広之先生に決定したことにフロアから挙手があった。というのも、これまで概ね会長が医師で副会長が臨床検査技師という本学会のスタイルであった。それが逆転したのである。場内は一瞬静まりかえったような、何かここから大波乱が起こるのかといった感じがした。しかし、幸いにも予感はずれたのだ。挙手された先生曰く、「本学会が大きく進歩した証」として賞賛されたのである。まさに私もぐっと頷を前に倒した。第5回の本学会に顔を出した時にも感じていたが、医師と臨床検査技師が同じ土俵で議論すること、これは近年大いにその重要性が叫ばれているチーム医療につながるスタイルである。これまで医療は医師を中心に構築され、対象者へ施されてきた。臨床現場はともあれ、臨床系の学会・学術分野においても医師の指導的立場は揺るぎないものであった。…それが変わった…と思った。

日本臨床衛生検査技師会の宮島喜文会長が特別講演の壇上に立った。「臨床検査におけるこれからの人材育成」と題した講演で、会長は「専門職」と「多能職」という2つの概念を打ち出した。「専

門職」はよく耳にする単語であるので改めて説明しないが、「多能職」とは何かということである。

「多能職」とは、これまでの病院検査部という決められた場所で実施するような検査ではなく、検査部の外で検査をする臨床検査技師を指すらしい。少し前までは臨床検査技師を「スペシャリスト」と「ジェネラリスト」に大別していた。大ざっぱに大学病院などに従事する専門性の高い臨床検査技師と、中小の一般病院に従事する広く浅く全ての検査に精通した臨床検査技師のことである。臨床検査も急性期から慢性期へとシフトしていく医療の変化に合わせていかなければならない。以前より検査の説明ができる検査技師が望まれていたが、なかなか全国的流れとして現れてこなかった。しかし、法律の一部改正により臨床検査技師は平成27年4月から診療の補助として採血に加え検体採取が業務として追加される。病棟・外来に向いて、検査の説明をすると共に検体を採取し検査を実施する。また、病院の外に出て在宅患者さんの検査を実施するなど。今こそ臨床検査技師は検査部という殻を破って外に出て行く時だと。「然もありなん」と私は頷を何度となく前に倒した。

本学会で外せないのはワークショップである。普段見ることのできない症例の微生物を経験することができる。今回は医動物関係の寄生虫・原虫・



第一会場 閉会式

衛生動物と真菌の標本を観察することができた。時に高飛車な物言いが議論の切っ掛けになったりすることもあるが、丁寧に説明して頂けるのはありがたい。

閉会式の後、恒例の「認定臨床微生物検査技師・ICMT 合同講習会」と「ICD 講習会」が開講された。認定臨床微生物検査技師・ICMT は技師、ICD は医師が受講し、その資格を維持しなければならない。ICD の講習会会場は余裕があったと思うが、認定臨床微生物検査技師・ICMT の合同講習会は入りきれず、私を含む多くの受講者が立ったまま

2時間の講習を受ける羽目となった。幸いにも帰路最終便の関係で途中退席する受講者も少なくはなかったようで、私は暫くしてその空いた席に座ることができた。

2日間会場に足を運び印象に残ったことは、開催場所にもよるが参加者は年を追うごとに増え、プログラム・抄録集も年々分厚くなって第5回の5倍程になったこと。そして、数年前から質量分析装置 MALDI-TOF MS に関する発表がプログラムを賑わして、今回も昨年の名古屋での学会に引き続き多かったことである。